

太田さんのご逝去を悼む

法学部の同僚であった太田俊太郎名誉教授の訃報が学部長秘書室からFAXで届いたのは、昨年四月の下旬に入って何日か過ぎたある日のことであった。添え書きには、すでにご葬儀は済まされたとのことですが、とあった。太田さんにお別れの挨拶をする機会をもてなかったのは大いに心残りであったが、その一方で、ひそかに逝ってしまったわれるというのは、いかにも太田さんらしい心配りだという感懷も、覚えたものである。

太田さんとは同じ法学部の教員として三十数年をともに過ごしたが、あくまでも慎み深く、遠慮深く、そして謙遜家であって、日常接するなかで、自分というものを強く押し出して他人を困惑させるなどということは、まったくなかった。

私が太田さんを知ったのは、大学四年の「英書講読」（当時の名称は「研究指導Ⅱ」）の授業のときであった。その授業に一度だけ、大学院修士課程一年の太田さんが

出席され、授業終了後に会話を交わす機会を得たという次第であった。

太田さんと再会したのは、それから二年余り後の昭和三十四年四月、私が会社を退職して大学院修士課程に入學したときであった。多分、私の指導教授であった石川忠雄先生の研究室で再会したのだと思うが、すでに法学部副手になっていた太田さんは、私のことをよく覚えていてくれて、それ以降、キャンパス内での交流が次第に密になっていった。

その後、博士課程一年時の昭和三十六年秋に、私は法学部助手に採用されることが内定したが、実は、助手に応募する決意をしたのは、その前年の秋の太田さんの「なぜ助手に応募しなかったのですか。私は期待していたんですけどね」という一言が、私の背中を強く押したからであった。太田さんの一言に勇気を貰って、私は思い切って石川忠雄先生に自分の希望を伝え、石川先生、伊藤政寛先生のご尽力があつて、幸運にも地域研究（アフリカ）担当の法学部助手という、当時の政治学科としては全く新しい専門分野の教員として、昭和三十七年四月に着任することができたのである。

人生とは出会いだと、つくづく思う。私なども人生の

節目節目で良い出会いに恵まれ、今日にいたっているが、そのもっとも重要なひとつが太田さんとの出会いであった。

幸い太田さんとは、第一研究室棟の同じ研究室で机を並べることになり、交流はいっそう深まった。太田さんはあまり自分について語らなかったが、実は当初音楽家を志し、慶應へ入学する前に音大に在学したことがあるとのことで、三畳間（四畳半だったかもしれない）の下宿にピアノを置いて、その下で寝起きしていたという回顧談を聞いたことがある。北区上十条の自宅の二階にある書斎には立派なグランドピアノが置いてあったが、その演奏を聴く機会がなかったのは、心残りである。

太田さんと音楽とのかかわりはその人柄からして別段不思議ではないが、バイクを飛ばす姿は、だれしもちょっと想像しにくいだろう。あるとき太田さんは軽井沢に別荘を構えたが、しばらくはバイクで軽井沢―東京間を往復していた。カミナリ族ならぬ「カミナリオヤジ」です、と照れくさそうに笑っていたのを、懐かしく思い出す。

万事に控えめな太田さんであったが、法学部の学部改革問題では、真っ向から正論を唱えて容易に引き下がり

なかった。振り返ってみれば、昭和四十年代を中心に吹き荒れた学園紛争の時代から、その後も続く学部改革の時代へと、我々は激動の時代を生きてきたという印象が強い。昭和四十八年秋には、「教授だけからなる教授会」は廃止され「全専任教員」からなる教授会がスタートしたが、それに先立つ一時期、「助教授以下代表」が数名教授会にオブザーバーとして参加していたことがある。記憶が定かでないが、太田さんも私と一緒にオブザーバーを務めていたことがあったのではなからうか。

控えめな人柄だったからといって、学校行政が不得手だったなどということはない。昭和五十二年秋から十年間、新聞研究所長としてリーダーシップを大いに発揮したことは、組織の長としての太田さんのマネジメント能力の並々ならぬ高さを充分に物語っている。

太田さんが「アメリカ政治」の分野で活躍されたのは、周知のことである。太田さんのライフワークはアメリカ大統領選挙の研究であり、その成果は『アメリカ合衆国大統領選挙の研究』（慶應義塾大学出版会、平成七年）として刊行された。太田さんがこの世を去られた二〇〇八年は、奇しくもアメリカ大統領選挙で初めて非白人（正しくは混血というべきか）であるアフリカ系アメリカ

カ人のオバマ候補が勝利するという、歴史的な年になった。太田さんがご存命であつたら、どのようなコメントが聞けたであろうか。大いに心残りなのである。

(二〇〇九・一・三一)

名誉教授 小 田 英 郎

太田俊太郎先生との想い出

太田俊太郎先生が亡くなられてからすでに一年が過ぎようとしている。先生と最初に接したのは、大学院時代藤原守胤先生のアメリカ政治史の授業においてであった。助手として授業に参加され、われわれの報告に耳を傾けておられる太田先生の態度には重みがあった。

太田先生とのお付き合いはそれ以来亡くなられるまで続いた。先生はアメリカ政治(史)の研究者であるが、政治学科では地域研究グループに属し、研究と教育において同じグループの先輩として私はいつも先生に親しくしていただいた。先生はまた石川忠雄先生に私淑されており、石川先生を囲む集いでもたびたび同席させていただいた。その意味で、私は太田先生に対し強い同門意識を持っている。

私の専門領域は中国政治(史)なので、太田俊太郎先生のアメリカ政治研究の全体的評価については他の方に譲りたい。しかし、太田先生にはアメリカ政治に託した

夢があった。その一因は先生がアメリカ建国史を研究された藤原先生の研究会の出身であることに由来している、と私は考えている。アメリカ建国史は、ヨーロッパの旧体制に比べると実に革命的であった。太田先生はそのようなアメリカに魅かれたのだと思う。先生との日常会話のなかからもそのことを読み取ることができた。

一九六〇年代はヴェトナム戦争の時代であった。私はその時期の学生であり、同時代人としてアメリカの政治・外交に批判的にならざるを得なかった。この時代に太田先生が中心となって編集された『アメリカの対外政策』（鹿島研究所出版会、一九七一年）で私も「ジョン・S・サーヴィスの延安報告」と題する論文を書かせていただいた。それは、ヴェトナム戦争を踏まえてアメリカの中国政策を批判したものであった。その時、批判にはやる私に対して、太田先生はそれでもアメリカには強さと惹きつけるものがあるとの趣旨のことを言われた。思い返してみると、そこには太田先生のアメリカ政治に対する理解の深さと愛着があった。

長年にわたる三田での生活において、太田先生と行動を共にする機会がいろいろあった。そのなかでも特筆すべきは法学部の入学試験改革の時であり、それに対する

先生の貢献であった。現在の入試制度の原型は十時厳同学部長の時代に作られた。その改革は見事に成功し、法学部の今日の地位を築く上で重要な役割を果たした。しかし、入試改革が行われる前の段階で、法学部には改革派と守旧派との尖锐な対立があった。太田先生は改革派の先頭に立って動揺することなく、私が少し曖昧な態度をとるとよく先生に注意された。先生の入試改革、ひいては現在の法学部の地位の確立に対する貢献は大変大きい。

太田先生、小田英郎先生と私は地域研究グループに属し、石川先生の下で指導を受けていた。われわれ三人は池袋経由で三田に通っていたので、帰宅途中よく雑談をする機会があった。話題は多岐に及んだが、三人は入試改革について意見が一致していた。時には各々が学部の会議などで厳しい意見を述べ、当時常任理事であった石川先生に注意を受けることもあった。あとから聞いたところであるが、この三人を「三田の三田（さんた）」と呼ぶ人がいたそうである。そのような人が「三田の三田」はうるさいということを石川先生に告げると、先生は彼らとて一人前の教授であるから自分から注意を促す必要はないという趣旨のことを述べ、その雑音はわれわれに達することがなかった。

長いお付き合いのなかで、太田先生との思い出は尽きない。最後に先生の秘話を一つだけ記しておく。堀江学部長の時代であったと記憶しているが、堀江先生を中心に政治学科の有志が学部将来を話し合うために御殿場にある経団連の研修所で一日合宿をした。夜の話し合いも終わり、しばしカラオケを楽しむ時間となった。太田先生のピアノの腕前、西洋古典音楽に対する造詣の深さはよく知られている。その先生が急に演歌を歌い始めたのである。その音程の確かさ、声量の豊かさ、節回しに皆圧倒された。普段は寡黙な先生であるが、意外なところで自らの能力を出し、急に自らの意見を述べて人を驚かすのが先生の好みらしい。

太田先生が病を得て入院されてからお会いすることができなかった。お見舞いに行こうとすると、いつも謝絶された。それは先生の美学であつたのかもしれない。私にとっては、そのことが心残りである。先生の奥様にはいろいろな機会にお会いすることがあつた。長女の早苗さんは私の文献購読のクラスの学生であり、長男の明彦君は私の研究会の卒業生である。先生亡き後も、太田家とのお付き合いは続きそうである。

名誉教授 山田辰雄

太田先生との最後の出会い

太田俊太郎先生が昨年逝去された。深く哀悼の意を表したい。

先生は長らく病に伏していらした。最後にお会いしたのがいつであったか、しかと思いい出せない。一九九四年に慶應義塾大学を選挙定年制により退職された後、北陸大学に移られたが、引き続き慶應義塾で教鞭をとられたほか、京都でも非常勤講師をされ、大変お元気で、同時にお忙しそうな様子であった。アメリカ政治の研究会などではしばしばお会いした。

その後しばらくして、ご体調を崩されたために北陸大学を退職され、療養生活に入られた。その後は、研究会にも出席されなくなり、お会いする機会を逸した。おそらく、その頃から公の場には一切ご出席されなくなったのではないかと想像している。お電話では時々お話しすることができた。お声はお元気な頃とまったく変わりがなかった。お会いしたい、お見舞いに伺いたいと何回も

お願いした。しかし、いつも先生は丁寧、しかしとてもはっきりと、お断りされた。まことに残念であった。

それは先生なりの生き方なのであるとも思った。しかし、このままでは結局お会いする機会をついぞ得られないのではないかと結論せざるを得ず、焦慮に駆られるとともに、無性に悲しくなった。

ところで、私の指導教授であった齋藤眞先生は二〇〇七年の二月に倒れられ、闘病生活に入られた。いくつかの病院で治療を受けられた後、読売ランド近くにある慶友病院に入院された。その年の夏、太田先生の奥様と電話でお話ししている際に、太田先生も同じ病院にいらっしゃることがわかり、その偶然にとっても驚いた。

一月の終わり頃、齋藤先生のお見舞いに伺うことになった。そこで、思い切ってお願ひしてみた。同じ病院に伺いながら、太田先生にご挨拶せずにただ帰るのは、あまりに理不尽に思えた。ほんの数分でもご挨拶させていただけないであろうか。

初めてご許可をいただいた。そして病院に伺った。ようやくかなった面会であった。

ある程度予想はしていたが、想像以上に痩せられていて、正直とても驚いた。弱られていることは一見明白で

あった。お声もたいそう弱々しかった。おいたわしい限りであった。

ただ、おそらく四〇分から五〇分くらいであったろうか。先生はよくお話しにいられた。声はときに聞き取りにくいほど小さかったが、ときにユーモアを交えながら、そして笑みを浮かべながら、まったくお元氣な頃と変わらず、穏やかな口調でお話をされた。私を筑波大学から慶應義塾大学に迎えてくれたことについても触れられた。

太田先生が私を慶應義塾大学に呼んで下さった。アメリカ政治研究会という月例の研究者仲間の勉強会の司会役が太田先生であり、私が連絡役であった。会の創設者は齋藤眞先生であった。たまたま研究会のご相談でお電話したところ、太田先生はいきなり、しかしいつものように大変遠慮がちに、「久保さん、私立大学に移ってもよいなどというお考えはお持ちでしょうか」と、話を切り出された。それまでの慶應のイメージは、失礼ながら、塾出身者しか採用しないというものであったため、まさに青天の霹靂であった。

決断するのに時間はかからなかった。お世話になってみると、大変快適な職場であった。多くの尊敬できる同

僚研究者にめぐり合うことができた。また、アメリカ政治研究の今後を担う後進を育てることもできた。一九九一年から二年間、ACLSフェローシップと安倍フェローシップを得てジョンズホプキンス大学で研究する機会をえることもできた。太田先生のおかげである。

実は、同様に感謝していることがもう一つある。

二〇〇一年夏の前であったと思う。東京大学法学部から移籍の話が来た。私のもう一人の指導教授である五十嵐武士先生が病を患われ、負担の軽い講座に移って、「アメリカ政治外交史」講座の新任人事を行った。その結果、私に移って来るようにとのことであった。慶應義塾での研究環境は快適であったし、一緒に法学部を少しでもよくしようと努力してきた先輩・同僚、あるいは後輩の教員との関係でも随分悩んだ。最初はお断りしようと思った。しかし、徐々に行政面の負担が増えつつあった慶應での生活が、当時ややきつくなってきたことも確かであった。授業負担が少なく、心機一転研究に集中できそうな新しい職場も、本来研究者を目指した人生である以上、魅力的に見えた。ただ、最終的に決断するにあたって、もっとも心にひっかかったのが、私を慶應義塾

に招き入れてくれた太田先生に対する後ろめたさであった。

それなりに重大な事柄であると判断したので、当然ながら直接お会いしてご相談させていただくつもりでした。しかし、先生はやはり面会を固辞され、いまこの電話で話すように促された。そしてすべてをお話しました。まことに気の重い一瞬であった。

ところが、太田先生は「それはおめでとう。ぜひお移りなさい。そのような時がくれば、そう言うつもりでした」と間髪をいれずに応答された。そのお優しい言葉に、文字通り涙ぐんだ。

私には太田先生の「弟子」と自称する資格はない。にもかかわらず、先生は何回か人生の重要な転機を提供してください、またおそらく通常の指導教授以上に終始一貫暖かく私の研究活動を見守って下さった。ご恩に報いることができたかどうかは、まことに心もとない限りである。ただ、私がいくら感謝してもし尽くすことができないと感じていることは確かである。

太田先生。大変お世話になりました。心よりご冥福をお祈りいたします。今後とも暖かく見守っていただけま

すよう、勝手ながらお願い申し上げます。

二〇〇九年二月二六日

東京大学教授 久保 文明

太田先生から学んだ 「米国政治の基本」

太田俊太郎先生の米国政治の講義を初めて受講させて頂いたのは、たしか法学部政治学科二年在学中の一九八七年（昭和六二年）春の日吉キャンパスであったと記憶している。翌八八年春から三田キャンパスで太田先生の第二三期ゼミ生の一員として九〇年三月に卒業する迄の二年間、太田先生に御指導頂いた。太田先生は米国大統領選挙直前の八八年秋から半年間、カリフォルニア州で研究生生活をお送りになられたため、「現代アメリカ論Ⅰ」と「現代アメリカ論Ⅱ」の講義は同年の前期に集中して行って頂いた。これらの講義は非常に刺激的で、私にとって今でも忘れがたい素晴らしいものである。

先生の講義の中で、特に、個人的に強い印象を受けたのは、米国建国時の政治理念と実際の政治制度の構築について、トマス・ジェファソンらの建国の父祖らの意図について基本から御指導頂いた点であり、大統領選挙人団制度（エレクトラル・カレッジ・システム）に大きな

焦点を当てられた講義であった。独立当時の一三州の大州と小州との政治的思惑や建国の父祖らの構想と現実について、太田先生から徹底的に学ばせて頂く非常に貴重な機会を得た。このような経験は、大学卒業後に、社会人として民間セクターで日米通商摩擦案件などの米国政治に関わる業務に従事する上で大変有益であった。また、二〇〇〇年大統領選挙当時、ワシントンDCに勤務させて頂いていたが、ジョージ・W・ブッシュ共和党大統領候補とアル・ゴア民主党大統領候補との大統領選挙戦はフロリダ州での再集計作業を巡る連邦最高裁裁定により決せられ、最終的には、ブッシュが大統領選挙人獲得数の過半数を上回る二七一名を獲得し、一般投票獲得数ではゴアに約五〇万票下回りながらも勝利するという歴史的選挙を現地で経験することができた。在学中、太田先生は、「一般投票獲得数では相手候補に敗北しても、大統領選挙人獲得数で勝利し、次期大統領に当選することは理論的には起こりうる」と大統領選挙人団制度に関する講義の中でお話しされていたが、そのことが正に起こったのである。当時の先生の講義を思い出しながら、異国の地で先生の講義を微笑みながら振り返ったことがあった。

また、太田先生には、米国のリベラリズムと保守主義の系譜についても基礎から御指導頂いたことも大変印象深く思い出される。世界大恐慌に対するハーバート・フーバー共和党権の保守理念に基づく政府不介入の対応と、ニューディール政策を導入して積極的財政出動を行ったフランクリン・ローズベルト民主党政権との対応を比較しつつ、現代米国のリベラリズムと保守主義の考え方の違いを御指導頂いた。講義の際に配布して頂いたフーバー大統領の保守理念が明確にされた演説のコピーを用いながら講義は開始され、大統領権限の拡大や大統領補佐官制度の導入、ウォーターゲート事件後の議会の委員会制度の大幅改革、「分断政府」の常態化、共和党内の各勢力分析など実に広範かつ有益なテーマを次々に取り上げて頂いた。

太田先生は、非常に謙虚かつ温厚な教育者でもあった。ゼミ生一同で新潟県湯沢で夏にゼミ合宿を行ったことがあったが、先生を囲んで八八年大統領選挙展望について議論しながら楽しく過ごしたことも懐かしく思い出される。また、太田先生は若き日にハーバード大学に留学なされていたが、留学中の一九六三年一月二二日にジョン・F・ケネディ大統領がダラスで凶弾に倒れたことを

同大学キャンパスで突然知らされ、同暗殺事件が当時の米国社会に与えた衝撃などについても御自身の貴重な体験に基づいてのお話しを伺ったことなども思い出される。ゼミでは御自身の学生時代の御苦労と比較しつつ、一九八〇年代後半の経済的に恵まれた時代に学生時代を送った我々に対し、我々の時代がいかに幸せであるかについてお話をされながら、社会に飛び立っていく我々に自らが信じる道を歩んでいくことの大切さなどについてもお話して頂いた。

慶應義塾卒業から既に一九年の歳月が経過しようとしている。太田先生の強い要請でご後任として慶應義塾で、長年、米国政治の御指導を頂いた久保文明東京大学教授の研究会などの末席に現在参加させて頂いているが、太田先生が久保先生を慶應義塾に招いて頂かなかつたら、現在、私が久保先生の御指導を頂いていることはない。また、久保先生のご後任として慶應義塾で御指導頂いている岡山裕准教授にも研究会などで御一緒させて頂いており、久保先生や岡山先生のような方々との出会いは太田先生がいらっしゃらなかったら実現しなかったであろう。民間のシンクタンクのはしぐれの一人として、現在も米国政治関連の業務に従事させて頂いているが、私の

「米国政治の基本」は慶應義塾在学中に太田先生の御指導により形成されたものである。

太田先生、どうぞ安らかにやすみ下さい。

住友商事総合研究所

北米担当シニアアナリスト

足立正彦

太田俊太郎先生 略歴

昭和五年九月二九日 岡山県岡山市に生まれる
昭和二十四年三月 岡山県立岡山第一高等学校卒業
昭和三十年三月 慶應義塾大学法学部政治学科卒業
昭和三十三年三月 慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程修了
昭和三十六年三月 慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程修了
昭和三十三年四月 慶應義塾大学法学部助手
昭和三十六年四月 慶應義塾大学法学部助手
昭和三十九年四月 慶應義塾大学法学部助教授
昭和四十六年四月 慶應義塾大学法学部教授
昭和四十七年四月 慶應義塾大学大学院法学研究科委員
昭和五十二年一〇月 慶應義塾大学新聞研究所長（昭和六十二年九月まで）
平成六年四月 北陸大学法学部教授（平成一〇年三月まで）
平成六年四月 慶應義塾大学法学部客員教授（平成七年三月まで）
平成七年四月 慶應義塾大学名誉教授
平成九年九月 法学博士（慶應義塾大学）
平成二〇年四月一八日 逝去（七七歳）

太田俊太郎先生 主要著作目録

一、著書

(単著)

『アメリカ合衆国大統領選挙の研究』

慶應義塾大学法学研究会刊 平成七年

(共著)

『変動期における軍部と軍隊』慶應義塾大学地域研究グループ

慶應通信 昭和四三年

『アメリカの對外政策』慶應義塾大学地域研究グループ編

鹿島研究所出版会 昭和四六年

『総合研究アメリカ (三) 民主政と権力』斎藤真編

研究社 昭和五一年

『原典アメリカ史 第六卷——現代アメリカと世界Ⅰ』アメリカ学会訳編

岩波書店 昭和五六年

『アメリカ独立革命——伝統の形成』阿部斉他編

東京大学出版会 昭和五七年

『世界の議会 (二) アメリカ合衆国』

ぎょうせい 昭和五九年

『アメリカ・ハンドブック』佐伯彰一他編

三省堂 昭和六一年

二、論文

「アメリカ社会の変容——特にニュー・ディールを中心として」Ⅰ・Ⅱ

『法学研究』第三一巻第六・七号 昭和三三年

「アメリカ政治史における革新主義の発生」

『法学研究』第三四巻第九号 昭和三六年

「一九六〇年のアメリカ大統領選挙——カトリック系大統領出現の政治史的意義」

『法学研究』第三六巻第四号 昭和三八年

「一九六四年のアメリカ大統領選挙——ゴールドウォーター現象の分析」 『法学研究』第四〇巻第五号 昭和四二年

「植民地時代より国家建設期に至るアメリカの軍隊と文民優位の確立」

慶應義塾大学地域研究グループ編『変動期における軍部と軍隊』慶應通信 昭和四三年

「アメリカ合衆国議会における先任者優先制——とくに常任委員会を中心に」

『法学研究』第四三巻第一号 昭和四五年

「大統領選挙委員団制の改革」

『法学研究』第四三巻第九号 昭和四五年

「アメリカ政治における郊外」

『法学研究』第四三巻第一〇号 昭和四五年

「アメリカ外交における孤立主義の史的変遷——建国期より一九三〇年代まで」

慶應義塾大学地域研究グループ編『アメリカの對外政策』鹿島研究所出版会 昭和四六年

「都市化と政界再編」

アメリカ学会編『アメリカ研究』六 昭和四七年

「武器貸与法（一九四一年）の成立——孤立から介入への転換」

『教養論叢』第四三号 昭和五〇年

「政界再編期にあるアメリカ合衆国の政党」

『法学研究』第四九巻第八号 昭和五一年

「有権者の態度変化」

斎藤眞編『総合研究アメリカ（三）民主政と権力』三省堂 昭和五一年

「大統領予備選挙制の問題点——その長所と欠陥」

『法学研究』第五〇巻第一号 昭和五二年

「一九四八年の選挙」 アメリカ学会訳編『原典アメリカ史第六巻——現代アメリカと世界Ⅰ』岩波書店 昭和五六年

「大統領選挙委員団制の成立——建国父祖による大統領選出の構想と現実」

阿部斉他編『アメリカ独立革命——伝統の形成』東京大学出版会 昭和五七年

「アメリカ合衆国議会における小委員会の抬頭——復権した議会の実態」

『現代中国と世界——その政治的展開』慶應通信 昭和五七年

「一九八四年米大統領選挙の結果と分析」

日本国際問題研究所

『国際問題』二九八巻

昭和六〇年

「アメリカ合衆国の政治における構造的変化——一九六〇年代以降、大統領政治に視点をおいて」

『教養論叢』第六九号

昭和六〇年

三、評論

「一九六八年のアメリカ大統領選挙」

『三色旗』第二五〇号

昭和四四年

「マクガバンの進出の背景と意義」

『三田評論』第七二〇号

昭和四七年

「ウォーターゲート事件の底に流れるもの——アメリカ政治の体質と展望」

毎日新聞社『月刊エコノミスト』

昭和四八年

「一九七六年米大統領選挙」

『三田評論』第七六三号

昭和五一年

「一九八〇年アメリカ合衆国大統領選挙」

『三田評論』第八〇七号

昭和五五年

「米大統領の座」

日本新聞協会

『新聞研究』三五五号

昭和五六年

「アメリカ合衆国の政治——大統領政治に視点をおいて——」

『三色旗』第四六六号

昭和六二年

「アメリカ合衆国の政治——大統領政治を考える——」

『塾』一四七号

昭和六三年

「これが大統領選だ——大統領選挙の方法とメカニズム」 新人物往来社『歴史読本特別増刊』四七五号

昭和六三年

「一九八八年米大統領選挙にみる民主党の苦悩——守勢に立つリベラリズム——」 『三色旗』第四九八号

平成元年

「アメリカ合衆国における民主的な公認候補者決定と議員定数は正」

『三色旗』第五一六号

平成三年

「熾烈なサバイバル・ゲーム 九二年アメリカ大統領選挙」

毎日新聞社『エコノミスト臨時増刊』

平成四年

「一九九二年米大統領選挙と今後の日米関係」

『三田評論』第九四四号

平成五年

「アメリカ政治への視点」

『三色旗』第五五五号

平成六年

四、翻 訳

レイモンド・E・ウォルフインガー他「アメリカの極右勢力——政治とイデオロギー」デービッド・E・
アプター編、慶應義塾大学地域研究グループ訳 『イデオロギーと現代政治』慶應通信 昭和四三年